

一九九七(平成九)年度 佛教大学国語国文学会(第二回)大会

佛教大学国語国文学会第二回大会を下記の要領で開催しました。

- 一、日時 一九九七年十月十四日(土) 午前十時より
一、場所 佛教大学 6号館

一、研究発表(午前の部)

続千載和歌集の研究	本学大学院(修)	中條 敦仁
李花集の研究	本学大学院(修)	中島みどり
続後拾遺和歌集論	本学大学院(修)	横田 賢治
堀辰雄論	本学大学院(修)	井上孝一郎

二、研究発表(午後の部)

太宰治論——太宰文学の女性像——	本学大学院(修)	青木 京子
横光利一論	本学大学院(修)	今西 信綱
フトコとランナをめぐる問題	本学教員	上野 辰義

一、講演

古典とは何か なぜ古典を読むか
——私の古典文学研究——

元大阪女子大学学長 片桐洋一先生
関西大学教授

一、総会

一、懇親会(於 京都パストラル)

*本会は国文学科教員、他学科教員、非常勤講師、大学院生、学部生、および卒業生の皆さんの任意加入による学会です。

*会費は単年度ごとの年会費であり、専任教員一五〇円、他学科教員・非常勤講師一三〇円、卒業生・大学院生・学部生・有縁の方一〇〇円です。

【口座番号】010204452966 加入者名…佛教大学国語国文学会

*会員は、機関誌『京都語文』へ投稿することができます(随時受け付け)。また同『京都語文』(非売品)をお届けします。

片桐洋一(かたぎり よういち)

一九三二年生。関西大学教授。

『主著・論文』『古今和歌集全評釈』上・中・下(講談社)、『伊勢物語の研究』(明治書院)、『中世古今集注釈書解題』一六(赤尾照文堂)。

小町谷照彦(こまちや てるひこ)

一九三六年生。東京学芸大学教授。

『主著・論文』『源氏物語の歌ことば表現』(東京大学出版会)、『藤原公任』(集英社)、『古今和歌集と歌ことば表現』(岩波書店)。

榎本福寿(えのもと ふくじゆ)

一九四八年生。佛教大学教授。

『主著・論文』『記紀と志怪小説——『古事記』中巻の所伝の成りたち——』、『古事記年報』三十八、平成八年一月、『古事記』と風俗・典教——序文・本文のかかわりと唐律——(『佛教大学文学部論集』第七十八号、平成六年三月)、『日本書紀』の被動式に異議あり(『記紀と漢文学』和漢比較文学叢書10、平成五年九月)。

田中幹子(たなか みきこ)

一九六一年生。甲南女子大学非常勤講師。

『主著・論文』『源氏物語』初音の巻の明石の君について——「谷のふる集をとへる鶯」歌の解釈を中心に——(『和歌文学研究』第七十号、平成七年六月)、『古今集』における季の到来と辞去について——三月尽意識の展開——(『中古文』創立三十周年記念臨時増刊号、平成九年三月)、『和泉式部』「冥きより」歌の「月」について(『仏教文学とその周辺』石

橋義秀・赤川真知夫・広田哲通・三村晃功共編、和泉書院、平成十年六月)。

上野辰義(うえの たつよし)

一九五二年生。佛教大学教授。

『主著・論文』『讀美の機能——源氏物語の「二重構造」——』、『国語国文』一九八〇年二月、『そのころ』で書き起こされる源氏物語の巻頭について(『国語国文』一九八五年一月)、『桐壺更衣の造形と人間像——「いとかく思ふ給へましかば」の解釈を中心に——』、『国語国文』一九九五年六月)。

黒田 彰(くろだ あきら)

一九五〇年生。愛知県立大学教授。

『主著・論文』『中世説話の文学史的環境』(和泉書院)、『中世説話の文学史的環境 続』(和泉書院)、『和漢朗詠集古注釈集成』全三巻(伊藤正義と共編、大学堂書店)など。

坂井 健(さかい たけし)

一九六二年生。佛教大学専任講師。

『主著・論文』『観念としての「理想(想)」——鵜外「審美論」における詠語の問題を中心に——』、『日本語と日本文学』16号、平4・2、『没理想論争の発端——斎藤緑雨と石橋思案の応酬をめぐる——』、『解釈』41巻4号、平7・4、『没理想論争の背景——想実論の中で——』、『稿本近代文学』21集・136・11)。

横谷一子(よこたに かずこ)

一九四一年生。佛教大学大学院修士課程在籍。

『主著・論文』『日野富子』——東山文化を支えたその56年の

生涯——(本学史学科卒業論文、「徳川家康」の文事)(本学国文学科卒業論文)。

三谷憲正(みたに のりまさ)

一九五二年生。佛教大学助教授。

「主著・論文」『太宰文学の研究』(一九九八年五月、東京堂)、「太陽」における「朝鮮観」——ある「奇妙な情熱」について——(『日本研究』一七集、一九九八年二月)、「大庭葉藏」という「美貌の青年」物語——岡田時彦の影をめぐって——(『昭和文学研究』一九九八年九月)。

村上隆彦(むらかみ たかひこ)

一九三二年生。佛教大学教授。

「主著・論文」『西條八十詩集』(編著・白鳳社)、「西條八十詩集」(編著・新潮社)、「中原中也」(編著・ほるぷ出版)。

有田和臣(ありた かずおみ)

一九六二年生。佛教大学専任講師。

「主著・論文」『初期小林秀雄の思想形式——ニーチェ「力への意志」と「宿命」』(稿本近代文学)一九集、平六・一一、「小林秀雄『無常といふ事』と「力」の認識論」(『文学研究論集』一二集、平七・三)、「正確な読み方技術」(明治図書、平七・一〇)。

穂田定樹(あきた きたき)

一九二五年生。前佛教大学教授。

「主著・論文」『中古中世の敬語の研究』(清文堂)、「御堂関白記・小右記の敬語・敬語表現(その一)その十六」(『岡山大学教育学研究集録』昭五二(六二))。

山口堯二(やまぐち ぎょうじ)

一九三二年生。佛教大学教授。

「主著・論文」『古代接統法の研究』(明治書院)、「日本語疑問表現通史」(明治書院)、「日本語接統法史論」(和泉書院)。

長尾秀則(ながお ひでのり)

一九六〇年生。佛教大学文学部専任講師。

「主著・論文」『初唐の三大考——唐・宋期の書論を中心に——』(『日本文学論』四十八、平成元年三月)、「歐陽詢「化度寺碑」考——敦煌本・王孟揚本を中心として——」(『國學院大學漢文學會報』三十五、平成元年十二月)、「蘇東坡「紙・筆・硯」小考」(『國學院中國學會報』三十八、平成四年十月)。

高橋貞一(たかはし さいいち)

一九二二年生。佛教大学名誉教授。

「主著・論文」『平家物語諸本の研究』(富山房)、「太平記諸本の研究」(思文閣出版)、「訓読玉葉」全八巻(高知書店)。

巻頭の片桐洋一先生の御稿は、昨年十月四日(土)、本学会第二回大

会で御講演をお願いした時の要旨である。先生の長い間の学究生活とその成果や所感を御講演いただいたのであるが、それを本誌に掲載させていただいて、これに過る光栄はない。小町谷照彦先生には、同じ中古文

学専攻ということで、特別に執筆を依頼し、御快諾いただいたものである。両先生に巻頭を飾っていただいたことに感謝申し上げる。

本号では、三島由紀夫の未発表の評論文を村上隆彦教授が紹介したのも特記事項である。黒田彰氏には、来年度非常勤講師を依頼している。

ようやく第三号までこぎつけたが、内容もそれらしくなつたと、ひそかに一同思い合っている次第である。一層の御支援をお願いしたい。

表紙絵は、正倉院宝物の筆。実用的な筆が十七本伝えられ、別に大仏開眼に使われた大型の天平宝物筆があるという。現在の、毛を束ねただけの筆と違い、みな兎・狸・鹿などの短い毛を紙で巻き込んで円錐形にした雀頭筆と呼ばれるものである。筆管はいずれも天然の斑文のある斑竹を用い、象牙の飾りをつけている。左端は斑竹管牙頭白銀筆、中央は梅羅竹管牙頭黄金筆、右側は豹文竹管牙頭筆といわれているもの。右端の上の筆の帽は、豹文竹管牙頭筆のもので材はハチク、帽の口は白革で巻いている。下方の筆の帽は沈香斑竹樺總管白銀筆といわれているもので、これも材はハチク、帽の頭は象牙、口は紫檀、銀で巻いている。図版は朝日新聞社刊『正倉院宝物 中倉』からの転載である。

京都語文 第三号

一九九八(平成十)年十月四日印刷
一九九八(平成十)年十月四日発行

編集発行者

佛教大学国語国文学会

〒603 京都府北区紫野北花ノ坊町96

電話(〇七五) 四九一一二四一

FAX(〇七五) 四九三一九〇三四

印刷製本所

株式会社プリント社

〒606-40 京都府左京区下鴨高木町38-2

電話(〇七五) 七九一一六二五

FAX(〇七五) 七九一一七二九〇